



特別  
~12  
1077  
42





利
1077
4/42



幻

五十二歲

董文歲

春堂兵部卿文系六條院理事

六條院思性事理事

中納言局中將局作清事理事

中將若島紫上清形事理事

二月對策紅梅盛事

旬宮愛二系院梅成事理事

六條院後入道良清方理事

若宮文若君遊治事

八月後明石清方給治事

明是清是行明石清方事

八月一日月夜散軍賦更衣清裝

事

祭日中將若贈各事

八月十日夜大將若依由事

六月見池某治事

七夕詠節我治事

八月十日書上因各供養極樂

曼陀羅事

中將若扇之可治事

九月月人菊綿治事

十月月夜事馬鳴治事

十一月大節日大將若以中將若人

少將亦系六條治事

破四反右少治事

年暮六條沈欲遂宗懷之令儲

佛名事

幻 花 以 初 烏 夫 谷

<sup>何</sup> 大 空 浅 か よ き か ら 一 夏 少 した

み え こ ん ぬ む の 川 赤 子 づ 縁 々

<sup>花</sup> 御 法 の 次 乃 一 源 氏 卒 二 歳 乃

時 の 事 乃 あり 其 の 事 一 月 乃

十 二 月 乃 月 を 一 々 乃 次 乃

の 事 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

月 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

松

の上とをひまをらるとあつていふ  
ふたりを薫る源氏軍十八の時生か  
おとろをみまへなるゆへ  
まゝ名前して号源氏年十二歳乃  
正月より十二月までを次方より三  
ふたりせうと此の上代とていふ心  
日と月と一とあつていふとあ  
らせり并

美い春年中十二ヶ月と具へ

我々前乃清法喜とて季を次て書  
上乃病悩の次方より死後より  
らうれ事とて本といふといふ事とて  
何時のうけおとすといふは縁  
歎れ甚しといふ事といふや自余事  
といふ事といふ

因

幻ハ眩メ光レナリ廿字より通スト  
去乃をうりて人解りはきてといふれ  
うらひなるやういふ

<sup>秘</sup>百子よりゆきけり去は物

あふみまれもわきそきま

<sup>美</sup>右乃弁の公よりり

<sup>私</sup>去は雲上けり黄一酒より

ふれまや

かゆさのあふきりくもあふ

<sup>私</sup>去乃ひりりあふ海まも六條

の清きりれらのおり

うあふ海なぬ

こたをまい乃屋りま <sup>事かこ</sup>

<sup>秘</sup>清法まわと女こいれお

とありまげき活なを今

えりま

兵部卿文

<sup>秘</sup>雲なり

うらまをなふこ

源乃和之を出給りて

へふりまや別りて

きいゆいせ

原

わが春は花もてしるやと人も如く  
なふらぬ春のそらつねさうら

何

あやう菊又うめを匂く白うら  
むしてちやと人もこあけり因

秘

春を兵ふるよはしめてしり

色直母のま

香をとめてまつらひなくたさる

花のぬきもさうらひやあすくま

秘

源をあくさうらぬ多きなり

多きなりたさるの春もてお

とせ

こころの下ふあゆもおほく

秘

兵ふる宮乃侍るなせ

何

蜻蛉日記に云はるしひはし乃

時うらりうたさるのおりもはこ

れくしきを紅梅乃たはぬら

なれ下しあゆしあゆしあゆ

よきあくとあゆあゆらみあ



きてあふ西一海といはれぬ  
こりちりぬ

あれは道はうしとちやまへさ人なく  
やし

不及川弄源の舟りたてし  
屋を人もかーとの居まへ  
共うのまへうりてちやまへさ  
人よやといふ  
こりぬにまへハ

秘 我乃が八人の脈をわらふ人  
まらや 奇

まらしかくみそまらう  
秘 源乃出乃なれゆへ人くまへ  
足まいりすふとあへまへう  
ふせ

あまの乃あまひまきさげて  
秘 けの字清偶とあ利偶ともむ  
ゆを次乃るなまら川さへなり

清く心付し川辭るや  
其可用之

からりなれば何しと云

源乃世いふひらりて  
とみ入給ぬをくさり

ゆゑとあるらん何しと云

花

中らりけり此のう  
一まう一は時女之宮朧月夜な

たにうらとがよ  
なり

何 秘

女三宮乃母りの事  
雲上のをみらり多ひ

たりあまをせし

是をたさし乃凡流也

まあやたをさし

是の女三女かしの事あり  
ひととありて

権舟沈腕月夜かしの事也

むねしとあやう

何 夏も花塙胸かしの云え

そのゆりれし心をもあ

秘 さらぬくせ

入る宮のさうり活ありか

秘 け一服を若草上葉さうりあり事

とせ

秘 女之夫や若草巻りりれこりぬ

雷くともいふ時のも

夫くをゆりよいさぬさうり

し

葉上大さこの事さうりみ活ひ

なり女この清事ハ実ハ事

かまは申しうり出活さうり

とせ

夏とともいふさうり

秘 ありともいふはれ社の夏なで





袖の——みろりうしき  
秘義 弁 川 記

此乃世よりつはてはわすれざるものなり  
幸

<sup>秘</sup> 此れより源氏の清心也

清法寺より後につけりしは殿の  
心もあはしき也

源乃慈歌のゆゑにわすれざるも  
いとせしきものなりと云ふはあはれ

まじく取らるるは

仰みよのまじくはてはるるも

河 掟 ツキテ

<sup>秘</sup> 至事と云ふは

めあす人のいのちをばして

<sup>秘</sup> さかす人なり

美目ありて人としりたり人なり

れあすのこひより

やうてこひより

私拭却千行ヲ更ニ万行ト修メ筆ヲ

流ル水ノ流ルあり

とくなくともはかりしよ

中納言君中納言かとし

中納言君とてさうさうい海さあらしき  
しり

れ

中納言君を二条のくれまゝにおさね

しりし時ありうとて流るる流

六條流のしれひしみまひし

ししと中納言君ありしりしりしりて

流乃が流とてまいるちりりりり

ししと二条の上り流るひしては

この人をししししおひひ流る事

をいりり

心しよありしり

葉上の中納言君を流しりりりり

しりしりしりしり源のたわひれ

景と心しり流るしりあつてのみ





毛公曰：節之為之也。

何文選曰：馬鬣、松、青、蘋。

禮記曰：檀弓。孔子之喪，有自燕來觀者，倉於子夏。子夏曰：聖人之葬，人與人之葬，聖人也。子何觀焉？昔者夫子言之曰：吾見封之若堂者。

對葉為聲  
取芳而高

見若露覆夏屋者

露謂茨也夏

屋今之門前也  
其取芳屋而早

見若芥者矣

芥取秀教  
子而長

徒若芥者

孔子以為母上雖  
登杖又易為曰

馬鬣封也

### 俗間名

本朝文粹

卷二云

菅贈太相國詔書

勢為時作

馬鬣年深蒼烟之松，雖老龍光露

暖紫泥之草，再新太平御覽云

周景武序山託曰：石門巖即松

林也。南臨石門洞中，仰視之，離之駢

塵尾，號為塵尾松。西巖異，特如馬

鬣，又葉五粒者，名五粒松。

豫章記曰徐孺子墓在郡南時杜  
牧守徐与於墓边種松鐘磬

廣列先賢傳曰頊琦立存母喪琦  
独立墳歷年乃就居喪踰制種

松柏成行

鬢胤 廣韻云毛長也 良涉功

又帝陸國風土記 香嶋郡曰

童子女松ありし云事あり記傳し

如後のとありし云お叶何畧く

水原抄云大國より八人の墓を名ふ

ふしし小松をなすひよ西事

ありしと云し又峯にけりなみ

本ありしと云ししくたねし

と云ししは松を馬鬣松と号す

ありし乃云成馬乃多らみ

しありしと云ししと云し

ひししと云ししと云し

ししと云ししと云し



うかひとあはれしきこひのこぼれを  
下冷後墓上ののりけをなれんれ  
しきみしとくろくくろくしき  
けしきれ乃上のこみしき  
なりけかきふりてえ

うしれんしきけしきしきしき

花 外人不見、應笑 白氏文集

人しむろしきしきしき

秘 人し射面なれしきしきしき

ふり

かこくあしき

可 頑

あしきしきしき

秘 世男のめさき

たむしきしきしきしきしき

しきしきしきしきしき

見トヤトハ半が右別あを

かこくあしきしきしき

秘

慈佛修心も平々々々うらうらなる所

事也

井 源氏乃公本生もかりりくう事

なみこのぬれし

何古

墨陸乃君う社をそなれいふす

なみこのぬれし事

秘

引せ文因

きこいの美ハ内り

秘

四石中言のぬれ事

三宮くさ

秘

白共る事

くのれあひくはとて

秘

業上乃遺之をの活あり

いとあつれと

源乃清んや

きこくぬれハ

二月よりきり

かろあつこの紅梅

可

しきしころる梅の本みりしり  
心みけしき風なる海

六

みりしに神をひらぬるなり人乃  
かこみりえいしうしむる

うらひとのまかむら

れ

聲 華

明詠下

奥

うらむらしきのあうしむらむらに  
あうすふまてきあうしむらと

河

こらぬは白ひとこらぬよ梅りるれ

秘

あうあうまふとれう

鳥ハ花乃あうしのゆくまははは  
くしりあまもまやけきうみままて

二条院まてのまや

昇

二条院せけまてふら六條院あうし

しきし 礼云浄法乃時の花は事

まし二条院かりしといぬら六條院の  
梅もし三君れぬしとまらうし

しきあてはあうし 空昇

去るくありけり

秘 是より六條院の事也

三月ふらりてみり

おまののささぬいあしゆりうらな

六條院のまはくあり

りてふまふさうらあしゆり

花めし源の貧者をかき雲の

くろとせ

このせりぢうのぢう

秘 源のあらせ

弁 源氏のくまの秘もまてきん

とは又まことの心成れぬあり

あふ

河 中よまのぢうもきこしぬ奥山

ぬれをあらを人のまじりなし

かほさくちひしき

河 春櫻 和名 梓櫻

そのまじりぬれぬのあらを

秘  
しくましくとしくとましくとましくとましくと

まよせ

并  
又六條院のゆりといゆり

まよまよまよまよまよまよまよまよまよ

并  
三女の半幻雅の心二条六條

別れ二条院は似たり

秘  
けはよして二条院まよまよまよ

はまよとこの六條院の心まよまよ

まよまよまよまよまよまよまよまよ

ふ別なりての心幻雅の心なり

まよまよ

まよのまよまよまよまよまよまよまよ

まよのまよまよまよまよまよまよ

何  
共愁日照芳雅駐仍張惟幕

兼  
兼法凉 文集  
牡丹芳

花  
唐修宗海宮中花園以重項帳

蒙被欄檻置惜唐御史掌文

号曰拓香  
今兼三女乃思



ふる活舟り清心く身を唐鏡うまむ  
橋花清史とくきりくしとなつと  
あやふらりの神りし先人  
智あふらりきしきりあふらり  
とを

おろふらりの神りしあふらり  
大せくくあふらり神り  
長保くあふらりあふらり  
川舟日は舟りあふらり  
秘

しりけ本丁とてあふらり  
事とあふらりあふらり  
と判りあふらり

君くあふらり  
三宮とあふらり  
とあふらり

あふらり  
あふらり  
あふらり  
あふらり

——とありし三宮——とありし

もの——とおく——て

<sup>秘</sup>三宮乃心并

くのれぬひ——事を

<sup>秘</sup>室上乃のこまひ——屋——又源

のこりもくわ——とのほむとあり

——とあり并

ゆりく——り

<sup>何</sup>柱 日本記 福

此等の袖とむらさきくちりありて

<sup>并</sup>三宮乃源氏の清袖とむらさきく

ち多のや又三宮のよる袖もや

<sup>秘</sup>いなり——の袖もてと又源乃よてと

あり——

とよみのまへうららしき——かへり

て

源乃清く

いりんのきくぬ

いすくいすく若れ為し一志服の人と

まいのまわひあつと

秘

陰服一ころん

うゆるのくくと花やうなほまを

ころん

ろくのほむととろひよのつねあま

ししししししししししししししししし

まろまろ

秘

卒絹の束衣とろくつうせ志の浅

ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

齊

卒絹の束衣と

何

或人云妻服ハ一辺中ニ一衣志しと

六重流菱の上の時己、若服の浅わり

何うううううううううううううう

鞆く若服の浅ゆる志の厚なり

うろくうろくうろくうろくうろくうろく

若きう人志し夫朔の 蜀武程要

う服を三年まで若しきり官仕

乃義しあつす世習切なる所よ  
りてかこひて著し居も何事  
あんや 物忌令口年妻嬌子  
生妻や 服之十日服一年子  
不生多妻服女日服三月し若  
ハ妻の依よて三月の服を次年乃  
去らつゝのゆかり成し一夏ハ多  
けのふれくええさあり又さくせ  
日くみわよのけひことえさあり

そ又の並衣ハ衣服なりてを前夜  
宿者ち居りしハ暑やけ沈ととぬ  
まてく被著し羽衣の暑服あり  
てしゆらうやけして暑や  
向や

花  
笠上ハ七八月しりくれ所へり湯氏  
乃若平妻の服をゆらうき  
かきよとと之月なる人し志  
らにのり年乃去りてとむりん

乃由なり成り一と云はれぬるは竹藪と  
まじりてれりもあきてるのほのほ  
ぬる又みれともあやとほきく  
くして平絹ときき活ぬるなり

ひり一重明親王は延長乃清公の  
ゆふあうりありあの一暮の服麻丸とり  
きてとれ三年の同ハとてこ  
の衣裳り後ぬ養父と名を  
合意し年法とりらわゆるあよ

一皮にりみえりもこり乃  
志ハ法の外り事なり  
美あ妙哉

<sup>優</sup>しハとてありやいんなれ人乃也  
とせり去のこひを

<sup>秘</sup>業上れ心くして本草をもく  
ひり取をりり身れ世成のれか  
ありやいんとりり  
入る言のぬりりりりりり

井  
二条院よりしての事うてまてあり二  
条院よりと六条院へよりあり  
と心うくししう宮も人うりこの  
まてとあり二条より六條へ共  
しにわたりありはんとすうさ  
うと六条院よての事とみる  
へ

よりまし人うりといふれ

白文也

こゝののよりまし 蓋也

あゝもてあゝへ二条院せとえ  
うり

宮をがとをのせうとて後院うよ  
みあり

女三宮也

なふりありあゝうあゝ  
女三宮の清り事と源乃やひ  
なふりあり

かゝるまゝなり

秘 此法養いよとけ綱あり

秘 後さし心なり

并 けりし徳えさしあり

私云さきし清え

ありの氣乃々え

秘 時<sup>心</sup>氣を佛の位養えりわりのせ

あり<sup>并</sup>

まゝしんせし人

秘 此書上で

ふいりまのぶるれし

秘 六重虎乃東射をけし<sup>心</sup>のよみ

ふしひし

し人なるれま

秘 うむてし<sup>心</sup>ぬし<sup>心</sup>か<sup>心</sup>し<sup>心</sup>の徳む

いあふりし<sup>心</sup>むし<sup>心</sup>ありま

右 夫も<sup>心</sup>むし<sup>心</sup>のこ<sup>心</sup>ん<sup>心</sup>が<sup>心</sup>し<sup>心</sup>

し<sup>心</sup>ん<sup>心</sup>れ<sup>心</sup>け<sup>心</sup>し<sup>心</sup>し<sup>心</sup>

必 又とくも昔のいふ一 美河の門

弁 弁二首あり我しれ月好方

弁 久き人びの弁の心

云 一は去りし何れとなく

必 女之文の清きもや何しあくの心

何しぬもあしつる水清き

身しつらてふまの好む也

夫なれ若しは去とて我なれ

何きてせくらる也あしあし

美 女三ち月を早下しての流くとも

物あしあしとふあしあし

川なり

弁 何れてくらるの弁なりあつたま

けかしと也

其のいれきしてとるあし

秘 されしにきてもむしあれのいれ

をあらわしあしあし

あしあしとあしあし



るしとを

和泉歌

しをゆえよその事とさういて  
てはすみりりりれ事うねこ  
の心と事

糸  
葉の事とさう出まうまてふ  
くこととさ事あもふ事な  
きてやこいひとを

え  
さびてさうらりのやひとさ  
と女之まをわめを早トして

のまきよとさう入ととゆりか  
かえけりれゆりし葉なりと尻  
そまひぬまひてととさう  
あまさうらうくりし事とゆ  
うつきておまよハとさうゆり  
ふよゆもあうりし事とさう  
出ゆよせ

まゆりのゆりうれゆり  
むらさきのとらゆりかたひのすく

行くらうし事しとをけいしと  
いしとけいしと

ふらうしけいしと

<sup>秘</sup>人業上をさう出流せ

<sup>事</sup>業上の事しとさういしと

上めし人まうり流ひしや

私め名をさうしと

又ひしと流のさうしと

しとれしと

さあしとていしと

しと

あしと物おししと

あしとけいしと

今し女三ましと

けいしとけいしと

さしと

人をわしとけいしと

<sup>秘</sup>是しと源の流

え 是より沈りあしのよまかろりま  
ま

たうこのせよはせてあれたつよ

え まぬりくくろろひ一時をら  
や 井

秘 まぬらよりひ一まやわら  
かろり一時を命とほろろまひ

せ

いりらまら一まてぬく

何 月ハナてけらろりま一あし一あ

さ一はわ一い一な一あ一ま一く  
岡川之

ゆて目らけすらのま一さりみよ

秘 け  
ひ一ま一の一よ一れ一白一ら一の一ぬ一ま一は  
の一ぬ一ま一ら一や

井 源氏乃心業上のま一あ一れ一と一ま一  
いりひ一か一ら一ぬ一ぬ一や

いとおしうみくしよりかく

<sup>え</sup>ゆ衣上れまらう廻

大いこの人あふふあふりやまきなま  
人いふ

<sup>秘</sup>め石上の也各也

<sup>井</sup>大いこの人うた <sup>世</sup>上の人な

<sup>筆</sup>公家のうれつ子の人と云えれそふ  
深くすてこれせそとや

まりていそそふ

源氏乃れ事と云

さうりーあさこふ

<sup>筆</sup>年余の流道んういそと

さあも後天いんそと

おるそりかろにうさやう

<sup>何</sup>鈍<sup>ミヤキ</sup> 達鈍の心也

六條院世成まじらりまゐるさう  
そのまうあうの上大いこの世れ  
んをりうてぬんやひんり時

をよみこいさるるなりすみやうされと  
そのはらへんかかふやうか  
うゆをさるるすみりてめ事  
とあつちや二乃答ららのせしき  
そしきいこうこさるるかかふい  
ぬりみこてきりいおし  
みされなくかきしうろぬれちや  
しきあしきさるるせしきとあ  
りの字をよみりよみりて

不義やうゆしん  
よしきさるるさるるや或人物  
れよなしき義ゆかしてよ  
まうしきさるる

義中宮清一類の事よ清の  
らぬ事いあうまうしき

はわしきみりてさるるさるる  
始終道んさるるすしき  
らるるをさるるいあうしき

世に任るる心もさし一は是れ世  
の心はすみえらるる心

おひやまきゆきいん 句 羨

羨せのうりあしあまの時をわづらひ  
こころいひこく上紙交す

いぬのふみあま

道心はせりり心として入るるや  
ものなり花より花の流るる  
事とをきりり通紙かゝの類はま

ま(た)りませ

さよふとふらる

辛 ちかうたませ

羨世と信るる道心なりといふ  
み人多し

それされらるる

え およみ人こそたしかぶ  
あまのりよ道世なすりたるあま  
未と海つらむせしあまむら



かまてあらのとらん

秘 源の洞苑

こころさいのま

秘 荷の雲や 苑

并 荷の雲二月う崩

心あつはしとらん

何 涼草の野の梅の橋心あつはし

——はかりを墨をあらうさげ

秘 羨園の是

えしはたこの世しむて

秘 しひまきこころの静みせ

うららかなるこころあせ

荷の雲の鳥の事さかこころいひぬき

まはら見とくこころの静みせ

秘 公家のみまきもぬんいおころゆき

ちかぬあつらんをたれて

秘 雲上のまや苑

かみ中のつれこころ 秘 よせのまよこころ



おさふふいふとあり

幻がふりやあふとそくんりたる  
みままで別てらら捨れぬか  
好くまよせ

かこくまよの

養  
有つがふしとくしとてまふの  
事らりありあふぬまよのや

かくてもあつていふまよ

秘  
まよらりこまより好くまよ

女とおありし

秘  
げもの字氣略して人多く源と  
わら

いりぬかみ 源氏 井 源氏の心

あくくもゆりう 源氏 ねらりのうは

いりしとけわのそこらふらぬ

秘  
うりうらふせうり三月事ふれぬ 井

何  
あつてせぬわのやこよとけふれ

まうらりあ 井 房も帰や 井

房のうこよ我は 井 房も帰や 井

せうぞ

④ ここよ岸よりせうぞ

く乃西ありさ海いさめまありいと  
え  
くありの海さく海くさあり  
あひく東中よ我西あり海り海  
ーとや西きーいと見入るあり  
さうらうーとに秋方のーとみき  
あーありして海りさありふらみささあり  
ーゆかりーや

櫻

雁うあー東のれあー

黄くけ秋とれと海にさくふらあり  
しらに二色とあくうをゆるぬるや  
母ま白まるといふ東のおりーとさひてき  
苗代水ーは東とあくたよ海とあくさ  
心八雲のまーまさね八雲の海りれともみねとさ

又ノ美をびつされの上乃は八雲の  
西れともみねのなるとさ

せうぞ

④ ここよ岸へせうぞ

く乃由ありと海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
くありの海にせうぞ  
くありの海にせうぞ

秘

ゆ右上の我方をいさへて源  
なげきねをかかへて

秘

かゝる力一苗代りのみえり  
うつろいむらとくはす

秘

源を馬よ比へて源のこはれ  
よもせうぞ海にせうぞ  
日一かよて花うんとせうぞ  
又ノ美をげうれの上は海に  
ゆれともみちのなつて

乳

うい稠せ厚のわしし子母くさるる  
とりののぢやせ ね撰あ

林のうんかりうさあれてわいゆせ  
うらあふ人のしうさくやせり  
たのむれりのうさう源氏君とぬ  
とくそまうりて苗代あ乃ぬえ  
くさるるりーむのうげとるん  
ぬさゆ衣よもあぢりゆりさるり  
かりて乳しんさるもなれとく

ふかりうりのかさくうーあゆま  
さゆとはあーのうゆをぬえさ  
稠せ

葉

源と厚うはと 一葉葉乃ね  
うは源の氣もぬえ

弁

松苗代あをひらぬれぬさるる厚  
と源りたさく葉上なるぬえ  
しる源あしうぬえさるや源  
と乳と厚しーたさるる

云縁としてうりーと云なりり休  
乳とほさくわあーのうく源君  
母うらこしとくはや別おとの奇も馬の源  
乃まかなれんぞ

井  
花あそとてわゆしき

あまうれまうーまい綱り

秘  
初はひしうれ乃上あーのう愈とね  
あさゆーうう物ーううもまい源  
ーなり

末の世ーさうーみうーさううを

ーぬ

むーさぬのう愈もあーも屋て  
さうをうーあしらまてーさひ  
あひーとせ

又さうして世いぬらふりーとひと

花  
何ーのうくをハ流乃ん金とれそ  
うハうらふれーいまひーか  
と又ーううーうらひすん



月あかりや

<sup>花重</sup>夏よりそみらうそきほまじり  
ぬれおひもすこやハあぬ

<sup>花</sup>衣うそらにけきてあまら一  
ぬれおろのあもそらうぬり  
ぬれハあぬ一うそいふそら  
すみやいそぬこらあ

<sup>秘</sup>うそらうそいふそらあ  
ぬれおひもすこみやぬ一

葉上あうの衣裳おし潤一  
あそよつそてうそ一  
せすこあそぬ一は増をそ  
一そ

<sup>来</sup>あうそはけぬ花のあそ  
あそあうそぬそそ  
一そあひうその上の事と衣裳  
あうそあうそあうそ  
あうそあうそあうそ

ねらはずしよめ事ハあつてれさ  
ろなりちよいせりひとハ業上物と  
うけをくくさあひひーなり  
然ハりハるの事トして業上  
のましくいふ家財の金  
せりひまをくくさあひひ  
飽のいひい人なりあつたれ  
てとせりひ出ーあつた  
更りてれあひひをいひ  
せれとてさつりていひさ  
なり

私秘の委さるる

<sup>世傳</sup>人しうすきうりう家りよる

うけをくくさあひひ

<sup>花</sup>うけをくくさあひひ

お衣のうすきも

乃ひくくをいひ

<sup>秘</sup>公あつていひくく



可也

② 空蟬の世ざりといへり賜答

くわくすしき

さしあいのひていそくよう

のほ

③ 源乃仁若めりらや

くれあわれきこみさふ

④ 紅乃らぬ若れぬらぬ

河也

⑤

柑子あや服ふれぬの色せ

⑥ 葉より心さぬて服乃色之

さる也

⑦ 火さうりつれれ

⑧ 萱草の色ハ服者のゆり色や中

ね若れま若の服をきこりてま若の

服をハ一春乃るらる也

⑨ いろはらやの若れま若れ

⑩ 葵をあまひや中ね若りたり

酒と毒を

秘 道としつひに

回 あま日 人より毒をまるとり

中納言 何ぞいそはるるなりあふらんを并ん

りよのうらよと名さくよすあ

何 さもいれはるるのありしれあ

うき一葉をとよらるる一や

秘 くらくのあれま何海くく

ちりさる

いふはるるをぬるものさるなり

糸の白なほりりりりりり

幸よりあてしりり中納言ハ葉上

とらるるあてしりりひゆりあり

三弟のわらわは今葉上よりい

してたよりいりりいりりりり

いりりは葉のかさいりりりり

そりりいりりあひりりりり

とれりりりりりりり

上句おかしきも下句ハ源乃らうら  
なり事とどがのめうすなる  
二乃心をいよめ海むくの  
をわさるるすりしれハ社  
社のお乃のく水事もあな  
とらひひしとまの人れを海はな  
くうりて又か乃のくしと  
草かめわさりし事ハ  
なり

一乃くハたたりや中ゆを業上  
とみりあくこくか  
おしとめ草乃めし  
はまはまのくか  
きりしなりはきし  
花鳥瓶水説未定便心  
を縁え  
我云中将名さく  
あまきし  
ゆめをまはよくも

妙約一しうまののうし三草のふ  
しをうりたをたふりなり三草のふ  
ふもわをうり心せ業上うせ候  
てねハクしのうましりきうとこと  
白くまぬゆしり若きくうぬ  
ふしうりなげさの心なりし  
定家つ僻業しとまののふ  
半みしり

乳

信捕況うくののふを社なりし

あとして舞う入るふのをうりし  
定家流はうまの縁なりたふり  
乃の神社しりきうしりす  
今方うまのうみ方とせをうぬ  
うまことしけうりたぬし  
り僻業しりりり  
ゆり但源氏可賀茂宗の目な  
まは神社のうまもかみゆ  
ゆりしりしりしり

あつたが十一中ね君のあれか  
倉のうら三重れううたを  
まこといのかゆをれあし  
ろなりはりいともあのか  
名をいふまはりきくに  
さくともやうれあよとよ  
なり  
けうくろのまの半えを  
いふはりい  
あつた一社

可

かきうしと武又余社うし  
まへ八雲抄あまはりあ  
れ

赤無任者社奇命社  
清捕羽長隊

月報をいえ

判者後成  
源氏物語



とまよーと 一百歩みりして車の  
前をぐる花ゆかりけくさる入  
るあー  
いかりあしりりし園いなるれを  
りあをくすの津よゆらす家

とまよー

何しせきめい今ういふたれ  
かいらくをの津よくし  
とひくくくくくくくくく

くくくくくくくくく

津よけて君いあしりりし津うさい  
津よくくくくくくくくく  
けちと津中抄よ弘昭源氏弁し  
いゆり後成白のりうれすれを  
源氏くくくくくくくくく  
津中抄くくくくくくくくく  
弘補白院  
頭昭云くくくくくくくくく





ぬかしのちり今なづらふ事  
せよるはえ

奥義抄云神社一瓶とて  
それなほ水とあり幸成みひ  
ふものち汁のとてよれとのむ  
なりぬと乃社ふといとあり  
しと

<sup>を深</sup>大くこちあるとて一せふれとあり  
いあやつとてうすくし

<sup>れ</sup>源氏乃すあひを草なれら  
けしつり中得若かりは  
まう、草の名とよまはるや  
橋と飛とれ心あり

<sup>美</sup> <sup>松</sup> 自而ハ摘置え  
下句摘しとせり  
中ぬひりよはあひと子名を  
とけりさきとて  
飛と橋とあり



何

秋々残灯宵壁影葉々暗雨

打窓声 文集 秘笈因行

私云ふりの網さらりて吹ま

りて秋々残灯

そららき心らすりあしきひて

葉々暗雨二句をさふりや

海くうれふせり

美上ノ網り灯籠し吹ま

てとわり灯の事とより餘情

あり

いとつかさどるしあつあつ

何 独りてきくをゆき時きい

垣のしきふりせりや

井川より何海 秘笈因行 日川

秘 葉上よききせりうはとや夕音

のよるや 井

元 是し源氏の清しきをきき

あまふりトの網り

すみしとみかひもくか  
とみま

むしりすみはしはるるまふれと

秘 源乃組

うしりくおあし

秘 ちねよしひてのくおあし

心しはたしそしめしおあし

秘 源乃清い

秘 大直い志し人のはるる

そよしとくああし

は奇ねくくや

せはしはしは夕言れあや

かくのこきりしはまは

秘 夕言れの心

秘 夕言れは源氏をこま

かのうしめしはあし

秘 ちねのころあや

秘 野分乃あしあ

所をきよしとてまゝなりわとにぬきしを

秘

夕方の朔八月の周長もらひく

りや

并

八月の志也

兼

八月乃一周もらひくを云はる七

月き也

かゝりよりのけいひの事をもくお

とん

秘

源氏の朔也

よのけいひの事をもくおとんとい別

り普通一りこゝの事をもくお

と也

か乃いづしをくれみり極至れしんご

何

極樂曼陀羅事

白氏文集云 殊西方慎賢 并序

室私云才女ニ又有限跡陀賢

有女弟子弘農郡君姓楊号蓮

華性發弘願捨淨賊謀西方河  
沙陀佛像乃中國土眷屬一部  
奉為故李氏長姊楊夫人滅宿  
殃進真祐也

乃至贊云

金方剎余色身資聖力 福出規  
造者誰弘農君受者誰楊夫人  
當麻寺極樂曼陀羅緣記云右  
大臣藤原豐成女狀離土之志不  
淺欣求淨土之望是深晝夜冥

慕極樂之依正一報亦慕湯御之  
餘年自書寫稱讚淨土經一子  
卷不願禁中之文遊逐肖人  
門之榮耀焉比丘尼受如來戒天  
平室字七年六月十五日發一誓  
願一食長齋泰籠當麻寺我不  
見生身如來者永不入此寺懇念  
無二祿名不退也信心切之故感應  
是不空繞經立了日同月廿日一化

尼未曰欲見生身弥勒院者可調設  
蓮莖百馱許言畢去是故申下  
宣肯於近國募年身設蓮莖同  
女三日化后又來伴端嚴女人其  
齡三十許也化后与化女取蓮莖  
緣緣去寺乾六町許乃至化人令  
掘彼清淨之地靈水忽涌出浸  
蓮緣於其水深為色化女即以  
五色蓮緣女三日夜自亥剋至力

剋織極樂曼陀羅織之間寺乾  
角有織機之音聞化后与發心  
禪尼相對变化女織出曼陀羅  
二人前懸之奉礼極樂變相其  
方兩高一丈三尺廣一丈三尺三寸之  
化女施光明入雲西去化尼暫留教  
變相之功能於禪尼權化之圖道  
聞法銘肝 文略抄  
極樂のしんくす女人の多き

故和漢の先蹤あり

仍業として包く

領ふことあり

されと業上れ

一

かの僧都のいしり

秘 流とてあり

うの事としてあり

秘 夕雲の詞景陀羅師がの事

とさる中のせり

くはつり

但あやけ

ふつ

今あり

ふけ

う

合せ

備馬楽 律 黄川



ぬきかきものせり居りし事留りし  
ちりしよちあふちりしことあつし  
はるし  
山下畧々

一日乃けりありし

義を 范の事

秘日 具ありし

らららりよこ

巨々等し

明王乃 湖世代

義秘河海くうりくゆり担け  
お強のうとそ 年一之し  
年一腐にりり 終ぬゆと 不心得

英公此  
ヲモテ七葉

代此教よわるるに

兼河内国 文成 康 撰

本朝 於 陽成 光孝 宇多

醍醐

貞信公元慶四年 誕生 延長

己 天長 干時 大長 唯 延

比 者 年 又 貞信公 延長 八九 元二

朱菅院 受 禪 之日 蒙 用 白 詔 此

引入 漣 標 卷 以前 抄 改 号 三

之哉 延喜 泚 代 内 覽 治 斗 二 丁

七 用 白 号

一 説 忠 仁 公 唯 下 多 延 者 淳 和

仁 明 文 德 信 和

又

苑 為 多 延 和

兼 中 多 延 和

又 延 和

河景迹 合わつともろんし或云

さどくともろんし以下略之

合の文乃還京の二字とては形迹と  
スセり人の形迹れしと書さるる  
つこののともろんしと云ふ  
りのとろれともろんしと云ふは  
亦ともろんしと云ふは  
形迹とらるる約し遠京とも  
やと云ふ人の形迹と云ふは

乃賢吾と云ふもあれは人の通  
すともろんしと云ふは  
つこののともろんしと云ふは

つこののともろんしと云ふは  
つこののともろんしと云ふは

詩ともろんしと云ふは

奥、後天本記ノ宮、り

築 秘 日本紀 天本記下十二年

八月景迹行能

纂曰 日本紀。名もせと別あるの  
作文たの名もせとくれらるるも  
今、文。還迹ノ二字ヲ形迹トスル  
行迹ノ勝クせんヲ云々

みらし〜のおろよと

<sup>秘</sup>海のよ〜ちりてあり〜出〜給ぬ〜

并日

あまのり〜

<sup>秘</sup>別物 殆、將の名〜 纂曰

纂曰花鳥月殿上の舞の遊迹の  
りもれ〜水〜とも名の〜

〜りし〜 れは是なり

<sup>秘</sup>歌中おろと留り〜つさ〜父のれ  
〜も舞〜名のありし〜 れ

別〜る〜中あり

と〜の〜

<sup>秘</sup>條の約〜

あ〜お〜い〜

新新うさじん(新うさ)出流(入)ぬぬの  
中よよふふうさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)

新新うさじん

新新うさじん

そーうの新うさじん(新うさ)ぬぬの  
用うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの  
若の中(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの  
り(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

新新うさじん(新うさ)ぬぬの(新うさ)ぬぬの

行

物してはらむまら

そこの事は、<sup>元</sup>あつこのたらしお行て

袖うはれおはるゝのこゝはら海へは

一しおちてゝ後作の御とあり

まゝのまゝ

ましてはるはの舞はらまゝ

こ舞の西回のまゝと大庭の所

まゝのまゝ

<sup>秘</sup>あゝのまゝのまゝの舞はらまゝ

りこまゝのまゝのまゝのまゝ

こ相意の所作のちりゝゝ

まゝ

舞はらまゝのまゝのまゝ

あゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ



養秘多(養上名并) 中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

養秘(養秘)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)

中約(中約)



策秘弘徽教方

やまの女も右の大臣のうらなをせらる

策弘平教の父

何ら結し(踏斎)後京(う)結し

延長七年二月廿七日御記之踏掌

所奉仕踏款後京(う)御射場

中務(親)王(左)大臣(下)侍史(左)教

上之御(亦)預(召)立(書)別(如)例(御

贈物(臣)下(贈)

踏款後京(う)と(村)事(行)

一(勘)定(進)出(事)は(わ)り(と)有(是)れ

時(分)の(身)ま(れ)と(わ)り(の)こ(と)り

ま(し)物(り)

策(口)恐(別)の(踏)方(此)後(京)う(う)結

あり(それ)い(お)り(わ)け(事)し(こ)乃(知

ま(れ)よ(わ)ら(踏)み(其)結(止)有(京

と(り)ら(あ)り(策)方(う)と(村)ら

結(乳)ま(る)の(ま)り(乃)策(し)と(わ)け

よりんれ

秘傳之結いづて付

心々々

秘  
今年右大臣の亭として始りしは  
わき 秘ノ宴會 考略ししあり

心々々者乃之々々 絵

秘  
飛香會者花宴の興

延長二年三月廿日右大臣

飛香會者花宴下有獻物事人

つづつ切落之三月十日より

者宴。右の花は實し

おりの事し。よりし。今右大臣は

よそ花は京より又天曆三年

四月十二日飛香會者花宴しし和歌



よ海しほさうりしつる本多本流道し  
さいふしとあつしつこしつしとあひ  
ゆり物ねしつと流るるしつゆあひ  
あつしつげ物る 業日尼海人も  
あつしつ書し揚世あつとあつしつねそ  
うつ物しつあつしつう海しつあつしつ流し  
らつしつしつあつしつ業しつしつあつしつ  
や 定殿の伴物しつあつしつ流しつ  
あつしつしつしつあつしつしつあつしつ

あつしつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ  
あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

已上花已上業

<sup>秘</sup>あつしつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ  
あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ  
あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ  
あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

私之はあつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ  
あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ  
あつしつあつしつあつしつあつしつあつしつ

はくらのり子殿

右大臣女

交りあはれぬ

養父秘弘俊之の御殿

源の姉妹

弘俊之の御殿

大正の御殿

私出の御殿

事

いふ

右大臣の御殿

よう

月あ

さゆ

この

右大臣の御殿

あ

源の事

兼納

四位中将

筆友大綱云の事

右中弁乃兄

<sup>喜作</sup> 予の言乃花とて此多の... 何うか

小君と海... 〰

<sup>秘</sup> おうら... 〰 我言れも乃よと

〰 〰 〰 〰

筆曰... 〰 作者の心と云

〰 〰 〰 〰

筆因我言の花と海とと自悟の

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰

〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰 〰









源中源のありしゆの女女交交しつゝのありしゆの女  
ふれしつゝのありしゆのありしゆのありしゆの  
とつゝのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの

源源とあるはと源中源中のありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの

乃乃のありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの

源中源中のありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの  
ありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆのありしゆの

の地の交りしを又を交りの  
糸の交りしを又を交りの  
やめ織おきとつりのいし  
唐装とく者すの事あり  
それ下めさうのう白ら  
唐の織と月の柄のうき  
い西の唐の織とすれ  
らとつげのい

直衣布袴

御あまのいせり

常乃袍は指あてと襦と  
布袴とつりき

よりいひし

下製秘のよりし 則襦秘の事し

直衣秘布袴と云ふことし

直衣秘の下製とこれと別の事

裳秘は西宮之上襦者直衣秘下着秘

親衣随使不常事

今案云りの帳(帳の衣のよきと云り)

や袍よ下(下)と云りわりの布袴

と云り今下用之事(且衣布袴の)

依时作(事)と云りの丸靴(或草)

帯(と云り)暗時の着(袴)野

太カク

みまのうのさね

親衣 秘 各の袍と云り(袍と云り)の

物衣(巾)是と位袍と云り其位と云り

と云り

わさきと云り大君と云り

親衣 秘 各の袍と云り(花の草衣)

よと云りわさきと云り

と云りわさきと云り

帯の袍(指貫)と云り

事(玉衣)と云り

らひと云り

昇  
初めの頃の  
やうなうら  
なさを言  
究つて  
大層な  
うらな

あつたあつたのうらな  
たうらなうらな  
大層のうらな  
何れも  
又もまた  
うらな

私に付着する用紙 葉のうらな

中

前乃約。あつたあつたのうらな

うらな  
何れも  
うらな

あつたあつたのうらな  
あつたあつたのうらな  
あつたあつたのうらな  
あつたあつたのうらな

あつたあつたのうらな

秘

女一宮の女と云ふ

葉の女一宮の女と云ふ





わつらしよのちから友のうしあひ  
<sup>秘</sup>花鳥祝ありしうし垣ころの共姫君  
多らしとうらしころ養老翁し  
<sup>を</sup>伴鶴の浪候も下うくころ業平  
新平のりころあはしし  
友花と縁すころり公志代ころ友  
舟のころとさころあころし  
舟のころしころ友のころ業のあし  
と志代ころあししししししししし

わくせ給そあし原田のれ給し  
も友のころあししししししししし

<sup>秘</sup>わしころあししししししししし

業日  
あひししししししししししししし  
のころ業  
あししししししししししししし



源乃名

世々あまの

兼日とて夜のまじりて

秘 此夜のありて海とさしたるあまのけ

しとねと 兼夜巻くも

志望人の思ふよきま

この戸くら

秘 交もらるのたへ

弘き夜のさし

は

秘 此勝月夜

うとせと

うとせと

と

扇と

兼夜

よ

は

関書之契斎（在物）昔之廉人の  
経けり（或あり）

源中君扇此ぬ（と）きんく（り）と

よ（り）（り）（り）（扇のぬ）（り）（り）（り）

ゆ（り）（り）（花）（り）

と海（り）（り）

あ（り）（り）（り）（り）（り）（り）（り）

（り）（り）

琴帯（り）と扇（り）（り）と（り）（り）（り）

子（り）（り）（り）（り）（り）（り）

私（り）（り）（り）（り）（り）（り）（り）

（り）（り）（り）（り）

（り）（り）（り）（り）（り）（り）（り）

（り）（り）（り）（り）（り）（り）（り）

（り）（り）（り）（り）（り）（り）

（り）（り）（り）

（り）（り）（り）（り）（り）

秘日

扇花うらむしんあしんちあつらひ  
らふかひつらひのあしんちあつらひ  
海らひつらひのあしんちあつらひ  
くめつらひのあしんちあつらひ  
終し

榊原らひつらひのあしんちあつらひ  
月秘のあしんちあつらひ

らひの結みれと縁あり秘一白此戸くら  
しんち

葉秘らひの結み縁あり

竹側見月

らひの結みれと榊秘らひ入されしんち  
いしんちあつらひのあしんちあつらひ  
あしんちあつらひのあしんちあつらひ

竹秘ゆいしんち

竹秘らひつらひのあしんちあつらひ

えらひのあつらひ

えらひのあつらひのあしんちあつらひと勝れ秘

ちりてき世の終りぬ

築田まゝの地へ勝のよきぬと

うきあつた

起勝月夜

ちりてき世の終りぬ

ちりてき世の終りぬ

何人云一言曲一言直若張り

此の地よりの女日何事りあれ

下張

ら張りよぬ地へ海よりの

あよこし河津と海のうれ中のみ

よあつた

ちりてき世の終りぬ

ちりてき世の終りぬ

前の平れ海よりの

あつた 勝の天柱

け中のあつた

あのをあつた

築田まゝの地よりの

いさよふ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ  
うらめし〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ  
あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ  
乃厚

あ〜(か)〜(か)のふ

葉秘ほそあ〜(か)〜(か)の智<sup>知</sup>多〜(か)〜(か)の  
ふ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

いさよふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ

あ〜(か)〜(か)のふ〜(か)〜(か)のふ



おまのまゝに書かされたるに於ては  
うゝおまのまゝに書かされたるに於ては  
とらふらふらゝゝ感ありや  
事いゝ事いゝ事いゝ事いゝ事いゝ  
ことし 筆回りの五六君未多の  
すすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
弟退らるゝ時あり  
花のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
私ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まがら説し 花は五六分明うゝ  
舟ノ弟にらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
そは説し 花は五六分明うゝ  
とらふらふらゝゝゝゝゝゝゝゝ  
筆秘凡源氏物語の中より巻  
とらふらふらゝゝゝゝゝゝゝゝ  
或部の新しきもの存あり  
筆の林勝乃とらふらゝゝゝゝ  
とらふらふらゝゝゝゝゝゝゝゝ







